ISSN 1340-2285

自然誌だより 夏

Natural history

三 重 自 然 誌 の 会 情 報 誌 101 号　　2014年 9月

三重で見つけた風景

写真１　虹の根っこ（2008年11月　津市安濃町）

「自然誌だより」に掲載される記事は，野生生物に関するものがほとんどですが，たまには自然がおりなす光景も良いのではないかと思い，古い写真を投稿します．

写真１は津市安濃町で見かけた虹の写真です．子どもの頃，「『虹の根っこ』はどうなっているんだろう」，「一度見てみたいものだ」と思っていました．ようやく念願かなったときの一枚です．

写真２は大紀町で見つけた光景．スギ林の中で，広葉樹の新緑やシイの花があたかも「日本列島」のように浮かび上がっています．大紀町崎にある紀勢大橋の上からから北の方向を見て下さい．５月上～中旬ならきっとこの光景に出合えます．

〈佐野　明：津市河辺町〉

写真２　スギ林に浮かび上がる「日本列島」（2008年５月　大紀町）

蘚苔・地衣ノート（２）　御在所岳

葛　山　博　次

御在所岳は鈴鹿山脈の中央部にあって，標高は1212m．主に花崗岩からなる山塊で，三重県側は急峻となり随所に岸壁が見られる．冬季は日本海側からの季節風が多量の積雪をもたらし，夏季は冷涼で，局所的には亜高山ないし高山的な自然環境も見られる．

山頂部一帯は，アカヤシオ，シロヤシオ，サラサドウダン，ベニドウダンなどのツツジ科の低木林ないし亜高木林にミズナラ，コハウチワカエデ，シデ類などが加わった落葉広葉樹林が優占し，林床はイブキザサにおおわれ，一部にはアカモノが生育するという植生である．随所に花崗岩の露頭があり，蘚苔・地衣のなかまが着生している．（以下文章中の№は葛山所蔵の標本番号である）

⑴ 注目すべき蘚苔類

標高1000m以上の山地には，亜高山から高山に生活の本拠をおくクロゴケ *Andreaea rupestris* v.*fauriei*（花崗岩上，№19855，19857，19950，20244など），ケシッポゴケ *Dicranum setifolium*，タカネカモジゴケ *Dicranum vieide*v.*hakkodens*（ミズナラ幹上，№20029，20235など），シモフリゴケ *Racomitrium lanuginosum*（花崗岩上，№20096，20102）などが遺存的に生育する．

苔類ではすでに山田耕作さんや小笠原昇一さんがカナマルハムゴケ *Bazzania ovistipula*（湿岩上，№20037，20038），ヤクシマアミバゴケ *Hattoria yakushimensis*，ヤクシマミゾゴケ *Marsupella yakushimensis* など３種は御在所岳が現在のところ分布の東限で北限地であることを指摘している．また，隔離分布する珍しい苔類であるオオミネヤバネゴケ *Cephaloziella kiaeri* が山頂下の岸壁に生育することも報告されている．

⑵ そのほか記録しておきたい蘚苔類

蘚類ではチャボスズゴケ *Boulaya mittenii*（ミズナラ幹上，№20145，20148），ヤマトツリバリゴケ *Campylopus japonicus*（花崗岩上，№19863），ツクシツバナゴケ *Coscinodon humillis*（湿岩上，№19854），チャボシッポゴケ *Dicranum fuscescens*（シロヤシオ株元，№19949），タカネギボウシゴケ *Grimmia donniana*（花崗岩上，№19848a），イトハイゴケ *Hypnum tristo-viride*（サラサドウダン株元，№19836），ヒメミノゴケ *Macromitrium gymnostomum*（ミズナラ幹上，№20238），タチヒダゴケ *Orthotrichum consobrinum*（ノリウツギ幹上，№20138），ナガバノシッポゴケ *Paraleucobryum longifolium*（腐植土上，№20024），コセイタカスギゴケ *Pogonatum contortum*（土上，№20195），ヒムロゴケ *Pterobryum arbuscula*（ミズナラ幹上，№20147），ハリミズゴケ *Shagnum cuspidatum*（湿岩上，№20077），オオミズゴケ *Sphagnum palustre*（湿土上，№20190ほか多数），ハイキンモウゴケ *Ulota reptans*（ミズナラ幹上，№20198）など．

苔類ではタマゴバムチゴケ *Bazzania denudata*（花崗岩上，№19885），シロコオイゴケ *Diplophyllum albicans*（岩上№，19984a），サンゴサキジロゴケ *Gymnomitrion corallioides*（花崗岩上，№20242），コアミメミゾゴケ *Marsupella commutata*（花崗岩上，№20035），オオヒシャクゴケ *Scapania ampliata*（湿岩上，№19874），ムラサキヒシャクゴケ *Scapania undulata*（長者が池湿岩上，№20232），ケシゲリゴケ *Nipponolejeunea pilifera*（ミズナラ幹上，№20027a）などである．

以上は2004年９月および11月に実施した重要生態系候補地「御在所岳山上一帯」蘚苔類調査の結果から抜粋したものである．

⑶ 地衣類

2014年５月30日，山頂一帯の地衣類調査を行った．目的は，ウメノキゴケ科サルオガセ属ヨコワサルオガセ *Usnea diffracta* とホンドサルオガセ *Usnea pangiana* の生育を再確認することであった．御在所岳では，ヨコワサルオガセは1960年にホンドサルオガセは2001年に確認されたことが報告されている．両種

は一般には高地の針葉樹や落葉広葉樹に着生することから，御在所岳山頂一帯を踏査したが，この時の調査では確認できなかった．

山頂一帯のミズナラやコハウチワカエデの幹には大台ヶ原山などにも多いオオカノコゴケ *Pertusaria multipuncta*（写真１）(№35594) やイコマウメノキゴケ *Hypotrachyna ikomae*(№35599)，冷温帯の樹皮や岩上に着生するテリハゴケ(ヒモウメノキゴケ)（写真２）*Parmelia laevior*（№35594，35597，35598)，モジコケ属 *Graphis* のいくつかの種の生育を確認した．

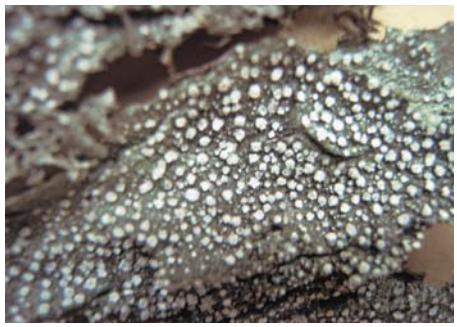

写真１　オオカノコゴケ *Pertusaria multipuncta*

写真２　テリハゴケ *Parmelia laevior*

⑷ 分布上珍しい地衣類２種

2004年11月20日，重要生態系候補地「御在所岳山上一帯」蘚苔類調査を実施した際，観察採集した標本のなかに分布上注目すべき２種類の地衣類が含まれていた．

①マユゴケ *Agonimiella pacifica* H. Harada（№20239B）

本種は山頂部のミズナラ樹幹にウラジロゲジゲジゴケ *Heterodermia hypoleuca*(№20239A) と共に着生していた．同定していただいた原田浩さんからは近畿地方初記録との指摘があった．

②フイリツメゴケ *Peltigera didactyla* (With.) J. R. Laundon（№20255B）

本種は冷温帯の岩上に生育する種で，近畿地方では兵庫県穴栗市，三重県名張市赤目渓谷で生育が確認されている地衣で，分布地の限られた珍しい種である．本種が山頂部の花崗岩上に生育することが明らかになった．蘚類のトサカホウオウゴケ *Fissidens dubius*（№20255A）と共に生育していた．

⑸ 注目されているイワタケ

イワタケ *Umbilicaria esculenta*（写真３）は本州では標高800～1000mの岸壁に着生する葉状地衣である．

着生する基岩は花崗岩・流紋岩が多いようである．この地衣はほぼ円形で直径５～10cmほど，上面は灰褐色，下面は黒色である．乾くと質はもろくこわれてしまう．古くから食用になる地衣として有名で，ゆでて酢味噌や汁の実として食べてきた．近年イワタケを含むイワタケ科の地衣類の炭水化物に制ガン作用があるということで注目されている．

写真３　イワタケ *Umbilicaria esculenta* の表（右）と裏

このイワタケが御在所岳の藤内壁の岩壁に着生していることを昭和の時代に観察した．早くに世を去った中井弘さんとの岩登りでよく見かけたが，当時から個体数は限られていた．平成時代に入ってからは，身体的にも岩場に入ることが困難となり，確認していない．若い世代に期待するほかない．

文中に記載した標本の苔類については山田耕作さんに，地衣類については柏谷博之さんに同定していただいたことを記して深謝申し上げたい．

参考文献

高木典雄．1973．御在所岳エクスカーション．蘚苔地衣雑報，(6)，78-80．
山田耕作・小笠原昇一．1972．御在所岳山頂一帯の苔類．三重生物，(22)，22-24．
山本好和．2009．近畿の地衣類．三恵社，名古屋，168p．

〈かつらやま　ひろし：いなべ市北勢町別名659-5〉

鈴鹿山系のジンチョウゲ属３種

市　川　正　人

ジンチョウゲ属のカラスシキミ，コショウノキ，オニシバリは３種とも雌雄異株で，カラスシキミとコショウノキは常緑小低木，オニシバリは夏に落葉する落葉小低木である．ちなみに，県内には分布しないナニワズはオニシバリ同様夏に葉を落とす落葉小低木であり，チョウセンナニワズは冬に葉を落とす落葉小高木である．これらは外見上ではよく似ている．

写真１　カラスシキミ（菰野町武平峠，2013年５月15日撮影）

写真２　オニシバリ（いなべ市藤原岳，2012年７月９日撮影）

カラスシキミの特徴は，林内・林縁に生育し，葉の脈は表の脈が目立って凹み，裏側へ著しく出る．花柄に毛があり，花は萼筒が５㎜ほどで緑色を帯び，萼裂片は４，内面は白く，５～６月に数個，頭状に着く（写真１）．本来の分布は北海道，本州（隠岐を含む島根県以東）の日本海側に生育する日本固有種とされるが，鈴鹿山系の三重県側（太平洋側）の２ヶ所（菰野町武平峠・朝明渓谷）と滋賀県側で生育を確認した．三重県での初記録は2012年６月18日のことである．地理的分布上滋賀県の生育は普通であるが，鈴鹿山系の太平洋側での生育は注目される．この事象は鈴鹿山系が太平洋側と日本海側の境界領域として位置づけられることによるものと推察され，同様の現象はほかの植物でもみられる．例えば日本海側に多いニシキゴロモは，この地域の三重県側山麓域まで生育域を拡げているが，図鑑によっては日本海側に分布する植物であると明記している．鈴鹿山系は植物の地理分布において興味深い地域である．

次にカラスシキミに類似するコショウノキは，林内・林縁に生育し，カラスシキミのような葉脈の表裏凹凸は目立たず，萼筒が９㎜前後と少し大きく，毛が密生することが特徴である．県内各地に普通であるが，花期が１～４月と早く，見落とすことも多いようである．国内では本州（関東以西），四国，九州，沖縄に分布する．オニシバリは林内に生育し，花は萼筒が５～９㎜，萼裂片４で萼筒の約半分の長さであり，内面が黄緑色である（写真２）．日本固有種で本州（福島県以西），四国，九州に分布する．オニシバリに類似で，林内に生育する萼裂片内面が鮮黄色，萼裂片と萼筒がほぼ同長のナニワズは，国内では北海道，本州（福井県・福島県以北）の主に日本海側に生育する．いまだ県内での生育報告はないが，鈴鹿山系北部の滋賀県境付近ではオニシバリとの中間的なタイプが生育する．

最後にチョウセンナニワズについてである．オニシバリに似てその相違点は前述の通りであり，国内では本州（関東北西部・中部），奈良県，四国の石灰岩地に分布するとされる．国内分布地域と環境が似た鈴鹿山系北部にこの種を期待し，調査を行ったが生育を確認することができなかった．本種については県内でも観察したという話を耳にすることがあるが，オニシバリの誤認ではないかと思われる．オニシバリの別名ナツボウズからは，夏の時期に葉がないと捉えがちであるが，実際には７月下旬に落葉し，まもなく葉を展開しはじめる植物のようであり，夏季に葉をつけた本種をチョウセンナニワズと見誤った可能性が高い．

参考文献

村田源．1989．チョウセンナニワズ・ナニワズ・オニシバリ．植物分類・地理，40（1-4），6．

〈いちかわ　まさと：四日市市堀木1-4-5 文化ハイツ606〉

粟谷小屋～西谷狸峠採集記

中　西　元　男

大台町粟谷小屋は，大台ヶ原日出ヶ岳の東肩部標高1000m付近にある山小屋で，紀北町中里からは大台林道を利用して車で登れる．林道の奥，標高1100m辺りの西谷橋から狸峠にかけて自然度の高いミズナラ，ブナの原生林が拡がり，三重県ではちょっと他に例をみない秘境的環境をみることができる．なんとなくズルズル続いている三重自然誌の会の粟谷小屋，西谷一帯生態系調査，いつまで？どういう形でまとめるの？の疑問はさておき，調査機会があれば外したくない地域ではある．2014年は７月28～29日に．

今回の参加者は主催者・清水善吉(以下ＡＢＣ順，敬称略)，中優，篠木善重，塩崎哲哉，上田利彦とボク（＝中西）の６名．28日，同乗希望者は８時事務所集合とのことなので，30分ほど早めに松阪市日丘町の清水氏宅を訪れ夜間採集用具などを「清水号」に積み込み，山道に対応できないボクのお嬢ちゃんフィットは置き去りにして出発．中里で林道の鍵を受け出し登り始めると「全面通行止め」の表示と共に砂袋の車止めが！手前に塩崎号と中号が止まっていて順法精神に篤いお二人待機中．そんなものは歯牙にもかけない清水号，中氏に車止めをどけさせ「後，閉めといて」と下車もせずにパス．

紀北町と大台町境，千尋峠ゲート前に９時40分頃着．通行止め表示を無視したらしい上田号が既に先着，残るは篠木号のみ．「じゃんけんぽんで負けた人が居残り，みんなさっさと粟谷小屋へ行っちゃえば？」という建設的提言は入れられず．ちなみにこの方法なら，相乗りのボクは結果どう転ぼうと勝ち馬に乗りかえるだけでノーリスク，とってもいいアイディアだと思ったンですがね．

全員で待つことしばし，遅れてならじと悪路を飛ばしてみえた篠木氏合流（これが後に大惨事の原因に）．ほぼ定時の行程で先頭車両は粟谷小屋11時前に着．空きスペースの真ん中に乗り込む上田号，「篠木さんの駐車スペースがなくなる」という清水氏に上田氏答えて「篠木号はパンクの上，車底部のカバーが剥がれかけて大変，工具貸して！」と何でも装備の清水号からキット一式を借りだしレスキュウーに．「同乗希望者手を挙げて～」「ハーイ」は正解だったわい，とほくそ笑むボク．何とか全員無事粟谷小屋に到着集合して調査開始．

粟谷橋付近の日溜りでエゾミドリシジミが盛んにテリトリー飛翔を行っており，既にボロだが時折新鮮な雌も飛び出す．スレてはいるがアカシジミもいて退屈しない．林道上をアシナガバチみたいな奴が低く飛び，すわ！とネットしてみたが残念，カミキリでなくガガンボじゃ！一応擬態しているつもりらしく，ネットの中で押えようとすると生意気に腹部を曲げて刺す真似をする．ネキでもないくせに(註)，と捻りつぶしてやろうかと思ったが，まてよ，去年篠木氏が採り損ねて大騒ぎしたクシヒゲガガンボとやらは確かこんなだったよな，と確保（真相は篠木氏に聞いてください）．

いったん小屋に戻り，夕食時間までは間があるので林道を下って堂倉若水方面へ．途中いかにもよさそうな満開のリョウブがあり，なにげなく見上げると花房の奥になにやらおデブな蝶影が．キバネセセリ？・・・と思う間もなく樹の裏側に飛んで見えなくなる．翅色は黄土色だったような！三重県のキバネセセリは古く本弘（1953）の大台ヶ原という記録以後永らく再確認がなく，本弘コレクション自体大部分が県博に収蔵されているのに標本が現存しないことから，県内産出は疑問視されていた．2000年に大杉谷で中村泰氏（未発表！）と松井弘見氏（松井ら2000）により相次いで再発見，しかしその後またしても杳として棲息情報が得られないという大珍品．本弘（1953）のみの時代なら「あれは絶対キバネセセリ！」と主張し注意を喚起せねばならないところだ．が，既に再確認の出ている今となっては，それはいたずらに採れなかった悔しさをいや増すだけだから，光線の加減で本当は緑色

のアオバセセリだったのだとか，イチモンジセセリがやたらでかくみえたのさと自分を納得させてしまう．桧風呂に浸かり湯上りのビールでも引っかければモヤモヤ解消．翌日日長一日そのリョウブの下で目を血走らせていようとは露にも思わない辺り，蝶屋として結構劣化しているのかも．

発電機が不調なので夜間の灯火採集はカンテラライトで．粟谷橋のガードレールに白布をセット．釣りたてアマゴの塩焼きでおいしく夕食をいただいた後，ほろ酔いで見に行くとレッドリスト2005のVUランク種，フタコブルリハナカミキリがぺっとりしがみ着いている．好調じゃんと思ったがそれだけ．やはり６Wブラックライトでは光源の力量不足はいかんともし難い．小屋の中庭では例によって清水氏がコウモリ捕獲用のカスミ網を張っているが，これは霞しか掛かった試しがない．

翌29日も晴天，狸峠まで行ってみることにする．前夜，小屋主の話では「西谷橋まで小１時間，その先２時間半」，全行程で２時間と踏んでいるボクの感覚とえらく食い違っている．林道が崩落，車が入らなくなってから確か最低３回は歩いて行った覚えがある．自慢じゃないが片道３時間半を踏破する根性などあるはずもなく，昨年崩落後の林道荒廃で，あちこちボタ山越えさせられたにもかかわらず懲りていないのだからそんなにハードなはずはない，と妙に自信満々．

７時半出発，崩落現場の車止めから歩き始め西谷橋までは確かにほぼ１時間．その先かつての乙部号遭難現場を９時通過．ずっと前まだ林道が狸峠まで通行可能だった頃の調査行で，乗せてもらっていた乙部宏氏の車が岩角で前後輪を切る同時２本パンクをやらかしたことがある．この時も「相乗り者」だったボクはお気楽に，最悪粟谷小屋まで歩いて下界に降ろしてもらおうとか，携帯でJAFに救助を求める乙部氏を残して，後たかだか30分くらいだから狸峠まで歩いて採集してこようか，なんて考えていた．きっぱり30分後９時30分には，西谷作業小屋跡を越えブナ林に到着，狸峠の道標に腕時計をぶら下げ９時40分の記念・証拠写真を撮る（写真１）．

写真１　大台林道狸峠で

狸峠，西谷ブナ林一帯は林床の乾燥化が酷くかつての好採集地の面影もない．林床のササが全て消えているのは鹿の食害のせいか(写真２)．古木が枯れ倒壊した後，幼～若齢樹更新がないので日当たりが好くなり林内やけに明るく風通しがよい．蝶屋はまだしも梢，林縁勝負だから往年の夢よもう一度ではるばるやって来もするが，現状の写真をみせて「粟谷小屋から歩いて２時間半だから」と甲虫屋を誘っても拒否されるかもしれない．

ブナの種子が芽吹かないのは温暖化のせい？幼樹が育たない原因はやはり鹿なのか？試験的に鹿避けネットで囲った場所で，ネットにからまった雄鹿の白骨頭部発見．角は欲しいけど「お頭」付きはどうもと躊躇する．現に死んでいるのだからネットに技ありと言ってあげたいが，これって入り込んだ奴が逃げようとして絡まったので，その時点で既に効果の程はど～よ？

写真２　西谷のブナ林の現状

ほどなく中，塩崎組も到着．調査を始められたお二人を残して先に引き上げる．粟谷小屋まで途中採集しながら２時間半，めぼしい成果なし．小屋からは塩崎号に乗っけてもらい下山．途中で篠木号に追いつく．「後ろからバックアップで行きま

しょうか？」と提案するも「まだ調査していくから」とにべもない．既にスペアを履いてしまっている身だから，もう１回パンクしたら進退窮まるのになァ・・・．

17時集合予定の千尋峠のゲート前で，やっぱり最後尾の篠木号を待ち流れ解散．大破の篠木号以外，皆さんのお車一通り寄生しました．お世話になり感謝します．

追伸：篠木さん，次はキバネセセリ採ってボクにちょうだいネ！

文　献

今村隆一．2006．フタコブルリハナカミキリ．三重県レッドデータブック2005動物，p.281.
松井弘見・中西元男．2000．父ヶ谷のキバネセセリ．ひらくら，(366)，77.
本弘道崇（1953）三重縣産蝶類目録（第２報）．佳香蝶，５（22)，19-29.
乙部　宏（2002）宮川村のヒゲジロホソコバネカミキリ．ひらくら，(379)，103.
篠木善重（2013）とり逃がしたガガンボの記録．自然誌だより，(98)，5.

註・ホソコバネカミキリ（＝ネキダリス）という，鞘翅がとても小さく飛翔姿形はアシナガバチそっくりなカミキリの一群があり，いずれも珍品揃い．狸峠では三重県初のヒゲジロホソコバネカミキリを採ったことがある(乙部2002)．最近沖縄で新種がみつかり話題沸騰中．

〈なかにし　もとお：松阪市新町959〉

写真にみる自然のうつろい－２．坂手島

清　水　善　吉

本誌91号でこの企画のシリーズ化を呼びかけましたが，反応は芳しくないというか皆無でした．立派なカメラをぶらさげた写ガールや写紳士の老若男女を見かけない場所がないほどの写真ブームですので，原稿には事欠かないとふんでいたのですが，考えてみれば同じ場所の古い写真はないわけで，無理目の企画だったようです．しかし，写真は自分で撮ったものだけではなく，化石や土器のごとく発掘すれば得られるという実例を紹介します．

写真１　昭和30年頃の坂手島（ＪＦ鳥羽磯部坂手支所提供）

写真１は昭和30年頃の坂手島の写真です．私は33年生まれですので，もちろん自分で撮影したのではありません．鳥羽市坂手島にはときどき調査に入っていますが，そのときには住民の方々といろいろな話をしながら，こんなヘビはいるかとか，あの宿の食事はどうかとかの情報収集をします．そのなかで，漁協（ＪＦ鳥羽磯部坂手支所）の事務所に島の古い写真があると教えてもらったのがこの写真です．

写真２　今の坂手島（2014年５月28日，安楽島から撮影）

現在の坂手島は広葉樹におおわれていますが(写真２)，林内を歩くとほぼ全域に石垣や段々となった地形がみられ，水瓶も随所に残っ

写真３　昭和初期（1930年頃）の坂手漁港．坂手島…その歴史と祭り…（村山眸1994）より

ていますので畑作をしていたことは想像できました．しかし，実際に写真でその当時のようすを知ると，「あー　すごいなー」と思ってしまいます．当時の島の人たちは，食べる野菜の大部分は島内で自給していたのでしょう．

島内では今でも畑作はわずかに行われていますが，多くの畑は昭和30～40年代の日本の経済成長期に放棄されていったものと思われ，耕作地が50年もたつと立派な森に復活することがわかります．古い写真の中央部分の森は若宮神社の社叢ですが，現在は島全体が鎮守の森のような状態になっています．東隣にある菅島では，採石した後を緑化するためになだらかな地形にする必要があるとか理由をつけて事業を継続していますが，即刻中止して放置するのが自然にとっては最善でしょう．この話題はまた別の機会に．

さて，坂手島は407人（平成26年１月末時点）が居住し，鳥羽佐田浜港から定期船で10分とはいえ離島ですから，多くの方が漁業に携わっているのかと想像していましたが，漁師で生計を立てている人は数人で，ほとんどがサラリーマンとお聞きしました．それでも昭和初期の坂手漁港（写真３）のようすをみると，当時は多くの方が漁で生計をたてていたことが偲ばれます．畑で野菜をつくり，海で魚介類をとって暮らした坂手島民の姿も大きく変わりました．

〈しみず　ぜんきち：松阪市日丘町1386-17〉

事務局から

○紀伊半島３県フィールドワーク交流会を実施

７月12～13日の日程で奈良，和歌山，三重各県から23人の参加がありました．場所はいずれも松阪市飯高町で，１日目は木梶三滝めぐり，２日目は宮の谷に行きました．とくに宮の谷は好評で，山林舎での懇親会も含めて楽しい２日間でした．来年は和歌山県の予定ですので，ぜひご参加ください．

○会報の原稿募集

会報「自然誌だより秋号」は12月発行予定です．観察記録や会への意見・要望，自然保護活動などについて，ふるってご投稿ください．

○2014年会費未納の方は至急お振り込み下さい．退会される方はご一報を!!

編集後記

101号をお届けします．今号から，どうせ発行を続けるならとカラー化にふみ切りました．当面はいけると思いますので，総天然色の自然誌だよりにふるってご投稿ください（善）．

自然誌だより101号

発行日　2014年９月20日
事務局　〒515-0835 松阪市日丘町1386－17
清水善吉方　三重自然誌の会
http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi

発行者　三重自然誌の会
郵便振替口座　00800-5-17842　三重自然誌の会
年会費　1,500円（個人）/2,000円（家族）
e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp